

# 大乘涅槃經と説一切有部

平 岡 聡

## 0. 序

平川彰が提唱した画期的な在家仏塔起源説により、一度は決着したかにみえた大乘仏教の起源も、その後の研究の進展により様々な問題点が指摘され、大乘仏教起源の問題は新たな局面に入った。在家者が大乘仏教の主導者であるという平川説は見直され、ふたたび出家者（あるいは部派）との関連で大乘の起源が問われるようになった。たとえば法華経は、説一切有部の文献と深い関係が多く確認される一方、法華経所収のジャータカは大衆部系の仏伝『マハーヴァストゥ』の伝承と一致するので（平岡 [2012: 248-253]）、単純に単一の部派と単一の大乗経典を直線的に結びつけることは危険である。

では、同一の大乗経典に複数の部派の文献伝承が確認されるとして、しかもそれが大乘経典全般に見られる共通の特徴とするなら、この事実から、大乘経典の創作に関してどのような仮説が成り立ちうるであろうか。ここでは、その前段の作業として、法華経に続き、大乘涅槃經と部派の関係を問題にするが、本経と大衆部との関係についてはすでに下田 [1997: 254-256, 323-419] によって考察されているので、ここでは大乘涅槃經に見られる説一切有部の伝承を中心に考察する。

## 1. 大乘涅槃經と説一切有部の接点（必要条件を満たす用例）

### 1.1. 天人五衰の内容と順番

臨終間近の天子に五つの兆候が現れるという天人五衰の用例を検討する。これは様々な資料に散見し、その内容や順番には違いが見られるが、まずは当該の大乗涅槃經で説かれる天人五衰の用例を確認してみよう。

釈提桓因命將欲終。有五相現。一者衣裳垢膩。二者頭上花萎。三者身體臭穢。四者腋下汗出。五者不樂本座。（xii 478a25-28）

(186)

## 大乘涅槃經と説一切有部 (平岡)

ではこの天人五衰の内容と順番を以下の諸資料と比較してみよう。出典および内容・順番は以下のとおりである。

## 出典

- ①大乘涅槃經 (xii 478a25-28) ②*Divy.* (a)57.18-22; (b)193.20-24) ③俱舍論 (*AKBh* 157.9-11) ④『大毘婆沙論』(xxvii 365b4-7) ⑤*Itivuttaka* (76.13-17)

## 内容と順番

	衣裳	華蔓	悪臭	発汗	座席
①	1	2	3	4	5
② (a)/(b)	1	2	3	4	5
③	1	2	4	3	5
④	1	2	4	3	5
⑤	2	1	4	3	5

この他にも、天人五衰の用例は『増一阿含經』(ii 677b29-c3; ii 693c11-14; ii 814c7-17), 『仏本行集經』(iii 676c21-24), 『摩訶摩耶經』(xii 1012a16-18), 『法句譬喻經』(iv 575b16-18), そして『過去現在因果經』(iii 623b13-14)にも確認できるが、大乘涅槃經の用例はこれらとは別伝承である(平岡 [2002: 213-215])。

ともかく、大乘涅槃經は有部系の説話文献 *Divy.* とピッタリ一致し、また説一切有部系の論書である『大毘婆沙論』や俱舍論とも極めて近く、説一切有部の伝承を大乘涅槃經が継承していることが分かる。ただ、大衆部など他部派における天人五衰の伝承(内容と順番)が明らかではないので、これだけをもって大乘涅槃經が説一切有部の伝承を保持しているとは即断できない。

## 1.2. 天子の御礼参

説一切有部系の説話文献には有部固有の様々な定型表現が説かれているが、その一つに「天子の御礼参」(平岡 [2002: 164-165])がある。これは「〔天に〕生まれ変わった天子や天女は直ちに〈(1) 何処から死没したのか, (2) 何処に生まれ変わったのか, (3) どのような業によってか〉という三つの心を起こすことになっている」(*dharmatā khalu devaputrasya vā devakanyakāyā vāciropapannasya trīṇi cittāny utpadante kutaś cyutaḥ kutropapannaḥ kena karmaneti*) というものであるが、これに類似した用例が大乘涅槃經に確認できるので、紹介しよう。

諸婆羅門命終之後生阿鼻地獄。要有三念。一者自念我從何處而來生此。即便自知從人道中來。二者自念我今所生為是何處。即便自知是阿鼻獄。三者自念乘何業緣而來生此。即便自知乘謗方等大乘經典不信因緣。為國主所殺而來生此。(xii 460a5-11)

ただし、ここではバラモンが地獄に再生したときの表現であるため、説一切有

部の定型表現とまったく同じというわけではないが、内容的には極めて近い。ただし、他部派の文献には同様の用例が見いだせない（平岡 [2002: 196-197]）、これが説一切有部の伝承のみと一致し、他部派の伝承と一致しないことは確認できず、よってこの用例は必要条件しか満たしていない。

## 2. 大乘涅槃經と説一切有部の接点（必要十分条件を満たす用例）

先ほどみた用例は、説一切有部との接点は確認できたが、他部派の伝承とは異なることが論証できなかつたので、必要条件は満たしていたが、十分条件にはなりえなかつた。そこで次に必要にしてかつ十分な条件を満たしていると考えられる用例を二つ取りあげる。この二つの用例の利点は、現存する各部派の律文献（およびそれに類する文献）すべてに同じテーマの話が見られるので、大乘涅槃經所説の用例と広律すべてとの比較が可能な点にある。

### 2.1. 梵天勸請：説法を決意した理由

大乘涅槃經には仏伝の梵天勸請に関する話が見られるが、これは『摩訶僧祇律』と『十誦律』を除く現存の広律すべてに説かれている（平川 [2000: 98-100]）。大衆部の伝承は同じ系統の仏伝 *Mv.* で、また『十誦律』も同じ系統の根本有部律でカバーするとして、ここでは梵天勸請のうち、ブツダが説法を決意した理由に注目してみよう。以下、大乘涅槃經と広律の内容を順次紹介する。

#### 大乘涅槃經

梵王復言。世尊一切衆生凡三種。所謂利根中根鈍根。利根能受。惟願為説。仏言。梵王。諦聽諦聽。我今當為一切衆生開甘露門。（xii 528b27-29）

#### 『パーリ律蔵』

梵天は言った。「世尊よ、法をお説き下さい。善逝よ、法をお説き下さい。有情の中には塵垢の少ない者もおります。もしも法を聞かなかつたら退墮しますが、〔法を聞けば〕覺りを得るでしょう」と。（*Vinaya* i 5.24-26）〔世尊は〕仏眼で世間を観察されると、有情の中には、塵垢の少ない者と塵垢の多い者、利根の者と鈍根の者、相貌の善い者と相貌の悪い者、理解力の優れた者と理解力の劣つた者がおり、またある者は来世と罪過に恐怖を認めて時を過ごしているのを見られた。見終わって、梵天に偈を以て説かれた。「甘露の門は開かれたり。耳あるものは聞け」。（*Vinaya* i 7.24-7.5）

#### 『マハーヴァストゥ』

（梵天は有情の機根には言及せず、ただ説法を懇願すると、ブツダは仏眼で世間を観察し、こう考えた。）〈私は法を説くべきか、あるいは説かざるべきか。〔説いても〕虚偽に安住せる集団はこの法を理解しないだろう。私は法を説くべきか、あるいは説かざるべきか。正義に安住せる集団はこの法を理解するだろう。どちらにも確定していない集団

## (188) 大乘涅槃經と説一切有部 (平岡)

は、もし彼らに法を説けば理解するだろうが、説かなければ理解しないだろう」と。そこで世尊はどちらにも確定していない集団を考慮され、(中略)法輪を転ずることを大梵天に約束された。「私は不死への門を開けり」。(Mv. iii 318.9-319.3)

## 『四分律』

梵天復白仏言。(中略)世間亦有垢薄聡明衆生易度者。能滅不善法。成就善法。(中略)爾時世尊受梵天勸請已。(中略)以仏眼觀察世間衆生。世間生世間長。少垢多垢。利根鈍根。易度難度。畏後世罪能滅不善法。成就善法。爾時世尊即与梵天而説此偈。梵天我告汝。今開甘露門 (xxii 787a12-b2)

## 『五分律』

(梵天)白仏言。惟願世尊。哀愍衆生時為説法。自有衆生能受仏教。若不聞者便当退落(中略)爾時世尊默然受之。即以仏眼普觀世間見諸衆生根有利鈍。(中略)甘露今当開一切皆応聞 (xxii 103c24-104a9)

## 根本有部律

[梵天は言った。]「[有情の中には]利根の者、中根の者、鈍根の者もおります。容姿は素晴らしく、教導しやすく、[心の]塵は少なく、生まれつき[心の]塵が少ない者たちも、正しい法を聞かなければ墮落してしまいます。世尊は法を説示してください。善逝は法を説示してください。法宝を理解する者たちもきっといるはずですよ」と。そのとき、世尊はこう考えられた。「私は自ら仏眼を以て世間を観察しよう」と。世尊は自ら仏眼を以て世間を観察された。世尊が自ら仏眼を以て世間を観察されていると、(中略)利根の者、中根の者、鈍根の者もおり、容姿は素晴らしく、教導しやすく、[心の]塵は少なく、生まれつき[心の]塵が少ない者たちも、正しい法を聞かなければ墮落してしまうのを見られた。見られると、彼には有情に対する大悲が沸き起こってきた。(SBhV 129.18-130.6)

ではこれを踏まえ、各資料で有情が何種類に分類され、またブツダはそのうちのどの有情を対象にして説法を決意したかをまとめると、次のようになる。

大乘涅槃經：三種類 (利根／中根／鈍根) → 利根

『パーリ律蔵』：二種類 (利根／鈍根) → 利根

『マハーヴァストゥ』：三種類 (利根／中根／鈍根) → 中根

『四分律』：二種類 (利根／鈍根) → 利根

『五分律』：二種類 (利根／鈍根) → 利根

根本有部律：三種類 (利根／中根／鈍根) → 利根

この比較から明らかなように、表現そのものが近似している訳ではないが、有情を「三種類」に分類し、そのうちの「利根者」を対象に説法を決意したと説く大乘涅槃經は、根本有部律の伝承に一致する。

## 2.2. 給孤独長者入信説話

題材として取りあげるのは給孤独長者の入信説話である。この用例も、現存する各部派の律文献すべてに給孤独長者の入信説話が見られるので、それらと大乘涅槃經所説の用例を比較考察できるというメリットがある。

問題にする部分は、給孤独長者が仏教と最初に縁を持つ場面である。給孤独長者が所用でラージャグリハの知人宅で止宿していたとき、翌日にブツダおよび僧伽を食事に招待することになっていたその知人は準備に取りかかっていた。何の準備をしているのかと給孤独長者が質問する場面から注目する。

### 大乘涅槃經

長者答言。不也居士。我明請仏無上法王。須達長者初聞仏名身毛皆豎。尋復問言。何等名仏。長者答言。汝不聞耶。迦毘羅城有釈種子。字悉達多姓瞿曇氏父名白淨。其生未久相師占之。定當得作轉輪聖王。如菴羅果已在手中。心不願樂捨之出家。無師自覺得阿耨多羅三藐三菩提貪恚痴尽（中略）故号为仏。明受我請。是故忽忽未暇相瞻。（xii 540c2-14）

#### 『パーリ律藏』

「私は盛大な献供を催すのだよ。明日、ブツダを上首とする僧伽を招待するのだ」。「長者よ、あなたはブツダと言われたな」。「長者よ、私はブツダと言った」。「長者よ、あなたはブツダと言われたな」。「長者よ、私はブツダと言った」。「長者よ、あなたはブツダと言われたな」。「長者よ、私はブツダと言った」。「長者よ、このブツダ、ブツダというのはその音でさえ世間において得難いものだ。長者よ、今、かの世尊・阿羅漢・正等覺者に見えるために、詣でることはできるであろうか」。（*Vinaya* ii 155.19-27）

#### 『摩訶僧祇律』

我今灑掃嚴飾。正欲請仏及僧。是故忽務。邠坻聞已。心大欣悦。即便問言。我欲礼覲可得見不。答言。可見。（xxii 415b10-12）

#### 『四分律』

我欲設大祠。請仏及僧千二百五十人俱。彼沙門瞿曇。有如是大名称。号曰如来（中略）。給孤独食問言。審是仏耶。答言。審是仏。再三問亦再三答。審是仏。時給孤独食再三問已。問言。仏在何処。我今欲往問訊。（xxii 938c2-9）

#### 『五分律』

仏出於世有大威徳。其諸弟子亦皆如是。我今請之故設此供。所以不獲出相迎耳。須達多言。我亦聞有仏當出於世。号如来（中略）。汝今所請為是仏耶為非仏耶。答言是仏。又問。今在何処。（xxii 166c16-22）

#### 『十誦律』

請仏及僧明日食。故作大施會。給孤独氏初聞仏名。心喜毛豎。問言。何人是仏。居士答言。有釈王太子。以信出家得無上道。故号为仏。（xxiii 243c28-244a2）

### 根本有部律

「ブツダを上首とする比丘の僧伽を食事に招待したのだよ」と。給孤独長者は、今まで聞

(190)

大乘涅槃經と説一切有部（平岡）

いたことのなかった「ブツダ」という音を聞いて、全身に鳥肌が立った。(buddha ity aśrutapūrvam ghoṣaṃ śrutvā sarvaromakūpāny āhr̥ṣṭāni). 彼は毛穴を粟立てると、その長者に言った。「長者よ、そのブツダとはどのようなお方だ」と。「長者よ、それは沙門ガウタマのことで、彼はシャーキャ族の家系の出身で、髪と髭とを剃り落とし、袈裟衣に身を包んで、正しい信念を以て家持ちの状態から家なき状態へと出家されたのだ。彼は無上正等菩提を正等覚しされたが、長者よ、彼をブツダというのだ」。(SAV 14.28-15.4; cf. SBhV 166.33-167.7)

注目すべきは、知人の長者から「ブツダ」という言葉を聞いたときの給孤独長者の反応である。大乘涅槃經は下線で示したように「初聞仏名身毛皆豎」とある。つまり、初めて「ブツダ」という名を聞いて身体に鳥肌を立てているが、この反応はきわめて感性的・パトス的であることが分かるが、これと同様の用例は、『十誦律』と根本有部律にしか見られない。

『パーリ律蔵』では給孤独長者はブツダのことをすでに知っており、またその直後にはブツダのことを「世尊・阿羅漢・正等覚者」と言い換えているので、彼はブツダの意味内容を把握しており、その理解は悟性的である。『摩訶僧祇律』では、まったく「ブツダ」に特別な意味を認めておらず、ただ長者の言葉を聞いて給孤独長者が喜んだとするのみで、『パーリ律蔵』の伝承とも一致しない。

『四分律』では、給孤独長者が長者に同じ事を三度尋ね、その長者が三度同じ答えをしているので、この部分は『パーリ律蔵』の伝承に一致するものの、「ブツダ」に特別な意味を認めていない。『五分律』でも、給孤独長者はブツダのことをすでに知っており、直後に如来の十号を以て言い換えているので、ここで見られる給孤独長者のブツダの理解は悟性的なものと言える。

というわけで、大乘涅槃經所説の給孤独長者入信説話は説一切有部が伝侍する律の伝承とのみ一致し、他の部派の諸律とは一致しないことから、給孤独長者入信説話に関しては、大乘涅槃經は説一切有部の伝承を承けていることが分かるのである。

### 3. 小結

まとめに当たり、まずは下田 [1997: 156] に基づいて大乘涅槃經という文献の問題点を確認しておく。本經には3本の漢訳があるが、このうち重要なのは曇無讖訳『大般涅槃經』40巻と法顕訳『大般泥洹經』6巻の二本であり、蔵訳は法顕訳『大般泥洹經』および曇無讖訳『大般涅槃經』の前10巻に相当する。つまり、曇無讖訳の第11～40巻に対応する蔵訳はない。このことから、曇無讖訳の第1～

10巻まではインド成立であることに異論はないが、それ以外の部分については中国での増広の可能性もあるとして、下田は慎重な態度を保持している。

今回ここで考察した用例はすべて曇無讖訳『大般涅槃經』の第11巻以降であり、インドでの成立が確実でない部分である。今回の考察が今後、大乘涅槃經の成立解明に向けて寄与するところがあれば幸いである。では、これらがインド撰述であるとした場合、どのような仮説が成り立つだろうか。法華經は説一切有部の文献との深い関係が確認される一方で、大衆部系の『マハーヴァストゥ』と一致する用例も散見した。同様に、ここで取りあげた大乘涅槃經は大衆部との深い関係が指摘される一方で、説一切有部の伝承を反映した用例が確認された。これは一体何を意味しているのか。このような事実から導き出せる可能性は、少なくとも二つある。

一つは、大乘經典が単一の部派の出家者によって創作されたのではなく、部派を越えた出家者たちが複数関与して大乘經典を作りあげたという可能性である。もう一つは、単一の部派がある特定の大乘經典を創作したが、部派を越えて仏典の閲覧ができた可能性である。本庄〔2011: 178-182〕は大乘教徒が大乘仏典を作成するにあたり、部派仏教の三蔵すべてを利用することができたのではないかという推測に基づき、大乘仏典作成の論理的・教团的環境を考察している。下田〔2011: 59〕は大乘仏教出現の背景として、經典の伝承が口伝から書写に移行したことを重要視し、「閉じた共同体の存在を前提とする口頭伝承においては異なる伝承の融合は起こりにくい。けれども伝承が書写され、写本という同次元に投射されたとき、諸系統の伝承は同等の権利をもった仏説として、相互に参照されあう関係に立つ」と指摘する。

以上の考察から、単純に単一の部派と単一の大乘經典を直線的に結びつけることはできず、大乘經典創作の背景には上記の二つの可能性に加え、さまざまな可能性を視野に入れて考察しないと、大きな陥穽に陥ることになるだろう。

---

〈一次文献（略号）〉 ※パーリ資料はPTS版、漢訳は大正新脩大藏經を用いた。

*AKBh* *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*. Ed. P. Pradhan. Tibetan Sanskrit Works Series 8. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1975.

*Divy*. *Divyāvādāna*. Ed. E. B. Cowell and R. A. Neil. Cambridge: The University Press, 1886.

*Mv*. *Mahāvastu*. Ed. É. Senart. 3 vols. Paris, 1882-1897. Reprint, Tokyo: Meicho-Fukyū-Kai, 1977.

*ŚAV* *The Gilgit Manuscript of the Śayanāsanavastu and the Adhikaraṇavastu*. Ed. R. Gnoli.

(192) 大乘涅槃經と説一切有部 (平岡)

Rome: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1978.

*SBhV The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu*. Part 1. Ed. R. Gnoli. Rome: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1977.

〈二次文献〉

下田正弘 1997『涅槃經の研究——大乘經典の研究手法試論——』春秋社.

—— 2011「經典研究の展開からみた大乘仏教」高崎直道監修『大乘仏教とは何か』シリーズ大乘仏教 1, 春秋社, 39-71.

平岡聡 2002『説話の考古学——インド仏教説話に秘められた思想——』大蔵出版.

—— 2012『法華經成立の新解釈——仏伝として法華經を読み解く——』大蔵出版.

平川彰 2000『律蔵の研究 II』平川彰著作集第 10 卷, 春秋社.

本庄良文 2011「アビダルマ仏教と大乘仏教」高崎直道監修『大乘仏教の誕生』シリーズ大乘仏教 2, 春秋社, 173-204.

〈キーワード〉 大乘涅槃經, 説一切有部, 大乘仏教, 部派

(京都文教大学教授, 博士 (文学))

## 新刊紹介

平岡 聡 著

# 大乘經典の誕生 仏伝の再解釈でよみがえるブツダ

四六版・302 頁・本体価格 1,700 円  
筑摩書房・2015 年 1 月